

自己言及性とポストモダンの社会学

酒 卷 秀 明

はじめに

例えばアンソニー・ギデンスのように「近代性の帰結」ととらえようが、あるいはまたポストモダンという言い方をしようが、我々の社会がある種の変化の節目にあることは認めてよいだろう。例として消費形態の変化をあげることができる。以前は車を所有することがそれ自体ひとつのステイタスであったが、その後特定の車を所有することがステイタスになった。外車とよばれる外国製の車に乗るには、ある程度の経済力が前提とされた。しかし現在では若者でさえもかなりの高級車を乗り回し、車だけである人間の地位を特定することは難しくなっている。むしろ車によって自分のライフスタイルを示そうという意識の方が強くなっているといえるだろう。車の価格だけではなく、何故その車を選んだのかという理由が重要になる。さらにその際必ずしも車の性能が問われるわけではなく、付着するイメージの方が意味を持ってくる。そして時には、「女の子が好感を持つ車」というようなことが最も重大なことになってしまう。

服装についても同じようなことが観察できるだろう。今ではあるデザイナーの服を着ることがその人の地位を表すのではなく、自分がどのように見られたいかということと結び付いてきている。もちろん服装はもともと集団帰属を鮮明にするための重要な手段であった。しかし、現在の若者の間では外部のものには分からない服装の微妙な差異によって仲間と認められたり、拒絶されたりすることがある。すなわちそこにはイメージを共有するものだけに通じる差異があり、部外者には理解できない意味が生じている。

これらのことからわかるのは、ある程度豊かになった社会では選択肢の増大により、使用価値以外の「物語」の消費とよばれるような、「もの」に付着した意味（あるいはこだわりと言ってもよい）の消費が行われていることである。そしてまたこのような指向性の多様化の影響は、例えば労働組合の組織率の低

下など、色々な方面に渡っている。そこで以下ではこのような傾向が生じる理由について、とりわけニクラス・ルーマンの自己言及性の理論と関係づけながら考えていきたい。

1 ポストモダンの問題

前にも述べたギデンスのように、上で例にあげたような社会の変化を近代の継続としてとらえる考え方もあるが、ひとまずポストモダンとくくることにして論をすすめることにする。すると先ず問題になるのはポストモダンをどのように定義するのかということになる。例えばアルベルト・シェールは急進的な多様性をポストモダンの定義としているが⁽¹⁾、確かにこのような側面があるのは間違いない。しかし急進的という言葉の意味を特定化していかないと消費の際に重要となるような、或る種主観的な意味の問題が落ちることになる。

ジョン・マーフィーによると、ポストモダン派の人にとっては解釈と離れた真実など馬鹿げているという。さらに欲求によって汚されていない真実を獲得するというのは空想でしかないということになる⁽²⁾。すなわちポストモダンは相対主義的な色合いを帯びていることになる。マーフィーはポストモダンについて次のように議論を続ける。現実を主観から分離することは西欧的な伝統を通じて目標であった。このような二元論的な傾向は真の知識の発見のためには必要であると考えられてきた。従って社会学者は客観性を少しばかり垣間見るために、彼らの被験者が自分自身や世界をどのように解釈するのか無視することを決め込んでいた。その結果社会的な現実とは抽象的に考えられていたのだということになる。それに対しポストモダンの知は因習化された知識のシステムを、その起源に人間の実践があることが明らかにされるまで解体していく⁽³⁾。

二元論にとって重要なのは状況的な不確定性によって拘束されていない知識のみが真実として扱われることである。哲学者や科学者は知識、文化、秩序を正当化するために絶対的な基盤をつくりだそうとした。今までの社会学も基本的に二元論的である。その結果、個人的な熱望は構造的な必要に従属的なものとされた。

この二元論に対しポストモダンの立場の重要性を理解するのに大切なのは言葉と現実が不可分であるということである。言葉は通路というより創造的な力

なのである。

もちろん言葉を現実の中心に据えることは社会学にとっては深刻な挑戦である。社会的な現象はもはや「外化」されず、また自然によって規定された同一性を持つとは考えられなくなる。一般には秩序の維持にとって不可決と思われる現実それ自身というものは正当化されえない。

マーフィーによると、ポストモダン派は真実を知識の言語的な基礎を求めての終わりのない探求へと変形させる⁽⁴⁾。すると社会は個人に優先する地位を持った、構造的な要素を中心に組織されていると主張する人々はポストモダン派は秩序の必要性を無視していると非難する。しかし秩序がまとめて拒否されるのではなく、コント、スペンサー、パーソンズによって広められた秩序の抽象的な解釈が問題にされる。構造的な命令によって奴隷化された人間は自律と自由を失う。というのは秩序は手の届かないところにある起源から生じるからである。秩序を規制する横柄な構造的なガイドラインを持ち込むのではなく、ポストモダン派の人々は、人間は差異を認識することによって互いに自由に近づくことができることを明らかにしている。人間を社会的な要求に一致させるのではなく現実の異なった解釈が直接統合されるのである。

マーフィーはこのようにして生じる秩序を「シスターゼ」とよんでいる⁽⁵⁾。シスターゼはシステムとは異なり秩序が形成される際の絶対的な中心を持たない。シスターシスというギリシャ語の動詞は人間や他の要素が媒介物なしに関係づけられていることを、それ故緩やかに結合された組織を形成していることを意味している。秩序は現実それ自身に依存しているのではなく、集合的な実践に依存している。別の言葉で言うと、現実は間主観的に制定される。

簡単に言うと現実とは、マーフィーによれば、少なくとも一時的には真実として受け入れられた言語ゲームのことである。制度は、普通は疑問をさしはさまれない、或る解釈の言語的实践を体現したものである。従ってポストモダン派の人々によれば、研究者は意味のあるデータを得るために構造や方法により課された制限を克服しなければならない。

ここでポストモダンについて議論をする際に注意しなければならないのは、この言葉の中に異なった意味が含まれていることである。アルベルト・シェールによると、ポストモダンの、生活様式や知識形態の多様性への弁護には批判としての側面と記述としての側面があるという⁽⁶⁾。ポストモダンは理性の

古典的な妥当性要求に対する内在的な哲学的批判であると共に、そのような要求が既に社会的に陳腐となってしまった状態も意味している。後者の意味ではポストモダン社会的に生じている発展過程の診断ということになる。

しかしポストモダンを生活様式や知識形態の多様性の肯定的記述という意味で理解するなら、ポストモダンは文化相対主義の一種ということになる。それに対しシェールは批判としてのポストモダンは多様性を記述するだけではなく、単一化という支配的な傾向に対して多様性の権利を基礎づける尺度を示さなければいけないとしている。生活実践の形態の多様性の社会的承認という要求は、単一化、統一化という支配的傾向に対する批判を含み、多様性の自己決定による発展を妨げ、制限する条件の解明を前提としている。この点では批判としてのポストモダンは近代との根本的な断絶ではない⁽⁷⁾。

するとポストモダンという概念を持ち出す意味はどこにあるのだろうか。シェールによると、社会学的な社会理論にとって重要な、ポストモダンの多様性の弁護の帰結は社会学的な社会分析の観点の変化が形成されるという点にある。近代的社会科学の社会的に履行されるべき合理性の潜在力に対する期待が、社会工学的にも批判的解放的にも裏切られたという状況に関し社会学の自己反省が必要とされている。ポストモダンは相対主義的ではなく批判として理解されれば、支配的な社会的なマクロ構造の内部での異なった生活や知識の形態の分化に不十分な考慮しか与えられていないという点に関し従来の社会学的な社会分析の手段の不十分さが明かとなる。

具体的に言うとシェールによれば、現在、なおも階級理論のカテゴリーで理解できるような社会的生活条件の経済的構造化の内部で経済的階級理論的な手段では社会的行為を十分に説明できない日常生活形態の分化が生じている。またウーリッヒ・ベックが環境問題等について「危険社会」と描いたような社会一般的な、階級縦断的な生活条件の変化も階級理論的なカテゴリーへの関連づけを難しくしている⁽⁸⁾。従って要求されるのは現在もまだ存在している様々な不平等を無視せず、しかも社会で生じている変化に対し敏感になっていくことである。

このような社会の変化に独特の理論をもって答えようとしたのがニクラス・ルーマンである。ルーマンは機能的分化と自己言及性という概念でこの変化を説明しようとしている。そこで次にルーマンがこれらの概念でどのようなこと

を考えているのか検討していこう。

2 ルーマンの理論

A 機能的社會分化

現代社會が高度に分化していると認めたとしても、このことは今までの社會分化論に欠点が無かったことを意味するものではない。例えば社會分化を分業という観点から把握する時、その利点は自明のものであって議論は必要とされなかった。従って近年まで分化の拡大は効率性の上昇を意味し、進歩と見なされてきた。しかし過度な分化は混亂の原因となる可能性があるし、複雑性の増大を必ずしも進歩と考える必要はない⁽⁹⁾。

それに対しルーマンは分化をシステムの分化の意味に限定しようとする。ルーマンによればシステムは環境とシステムの差異であって、それ故システムの分化はこの環境とシステムの分化のシステム内部での反復を意味する⁽¹⁰⁾。システム分化は単に、システムの中により小さな單位が形成されることだけでなく、自己自身の中での全体システム形成の反復を意味する。全体システムは部分システムと部分システムの環境という内的差異として再構成される。このことはそれぞれの部分システムにとってそれぞれ異なったやり方で行われる。全体システムはそれぞれの内的な切斷線により自身の中で重複して保持されている。全体システムは自身の現實を複數化する。例えば全体社會は政治システムとその環境とも言えるし、經濟システムとその環境とも言える。この意味でシステムの分化は異なった内的な視点によるシステムの複數化と同じことになるし、複雑性の上昇を意味する。

しかし分化は単に複雑性の上昇だけではない。同時に新しい形式の複雑性の縮減も可能にする。それぞれの部分システムは、自分のシステムと環境の差異を指向しながら、このことで全体システムを自分のために再構成することで、全体の複雑性の一部分を引き受ける。複雑な選択を可能にするには、解決するための問題を社會の水準から部分システムの水準へ移転することが要求される⁽¹¹⁾。それで部分システムは、全体システム再生産の多くの要求は別のところで満たされるという前提を通じて、負担が軽減されたと感じることができる。他方それに従い部分システムの全体システムへの依存は二倍になる。部分システムは全体システムの部分であり、同時に内的環境、ということは別の道筋で

全体システム、に依存している⁽¹²⁾。

ルーマンによるとこのような下位システムの形成には分節化、成層化、機能分化の三つの形式がある。分節化は下位システムとその環境の同型性を前提するのに対し、成層化はシステムと環境の非対称を前提とする。機能的分化は部分システムが特別な機能を特殊化する。分節化は未開社会に、成層化は文明社会に、そして機能分化は近代社会にそれぞれ対応する⁽¹³⁾。

しかしこれらの分化の形式は抽象的可能性としては組み合わせられるということを見落としてはならない。社会の類型はその第一次的な分化の形式を通じて区別され、第一次的な分化の形式には同時に残りの分化の形式がどのようにして利用されうかがかかっている。機能的分化は最高の複雑性と他の形式の分化との最高の両立性を示す形式である⁽¹⁴⁾。例えば、機能的に分化した社会では、加入と脱退が決断に依存するような組織システムの形成を通じて序列化された秩序を再び取り込むことができる。

ルーマンは以上の分化の結果生じる社会をそれぞれ以下のように特徴づけている⁽¹⁵⁾。

分節的な社会は自己記述に比較的苦労はいらないし、意味上の贅沢は少なく保たれることができる。これは一方で、生活の重要性が家計、集団社会、集落のような小さな単位にあり、より大きな結合はたまに機能しなければならないだけであったことに理由がある。そのためには場所や人物についての知識、場合によっては人間生活の所与の秩序を物騒な別の可能性から境界づける神話的な物語で十分であった。神話や崇拜の形式は、不確定的な決断、あるいは関係として明らかになることなしに、環境の条件、構造、利害と調和させることができた。

社会秩序がより強く非対称性や、それと共に不平等性の上に形成されると、意味上の贅沢も増大する。秩序の不確実性は感じることができるようになり、正当化とは言わないまでも説明が必要となった。このことは、中心と周辺、とりわけ都市と地方の違いが形成されるとすぐに、特にヒエラルヒー的な成層化の際に重要となる。後から見ると、この種の不平等性は特権的な立場をあたかも正当化の圧力のもとにおいたかのように見える。しかし事実上はそうではなかった。もし社会構造がこの分化の型に従うなら、その正当化は、他の形の秩序が実際的には全く考えられなかったので、必要ではなかった。それに応じて、

あたかも考えられる他の可能性に抗して決断がされるというような、「合意」や、「合意の必要」から出発することはできなかった。すべての意味の分節や社会的生活のよい形式は上層階級の現象ないしは都市の現象であった。

それ故、社会の自己記述が書かれるような位置はひとつしかなかった。中心のそれかあるいは頂点のそれ、都市あるいは貴族のそれである。社会的分化の非対称性は他の可能性を信じられるように、効果的に排除した。このような状況では社会のシステムのより宗教的な把握とより政治的な把握のあいだの違いは調停できない。このような違いは意味論のなかに受け入れられ、少なくともヒエラルヒー化された。宗教は意味論のなかで優位を得たが、他方自己を主張するには政治的中心と事実上は結びつかなければならなかった。それに対し当時と今の歴史的な違いは、より機能へ指向した社会分化への移行で社会の中での社会についての競争相手のいない表象の可能性は放棄されなければならないことにある。機能システムのどれもがこの特権化された地位を求めることはできない。それぞれの機能システムは自分の機能の優位の視点のもとから独自の社会記述を作り上げる。しかしどれもが自分の記述を他に強制することはできない。というのは個々の機能システムの具体的な活動が違い過ぎるからである。さらにそのうえ別の差異、機能的に分化したシステムとそれに対する抵抗、あるいはハーバーマスの言うシステムと生活世界の違いが加わっても、どちらの視点から社会が全体拘束的にあるいは少なくとも代表的に記述できるかは決定することができない。

このような分化の形式の変化に当てはめてみると、近代化とは成層的分化の機能的分化によるゆっくりとした置き換えの過程と記述することができる。例えば世俗化の過程もこのような変化の中で理解されなければならない。その結果、ルーマンによると相対的に安定した社会からより不安定な、計算のしにくい社会への変化が生じている⁽¹⁶⁾。

何故なら部分システムが順位をついた縦ならびから横ならびへ変化していくことで、すなわち機能的に分化した社会に移行するにつれ、そのひとつの部分システムを取り上げて全体のシステムを性格づけることはできなくなるからである。というのそれぞれの機能的な部分システムは高度な自律性を獲得しているからである。機能的に分化した社会においてはトップもなければ中心もない。あるのはその時々に変わる優先順位と部分システム内部での機能的な優位であ

る。

その結果このような社会においてはそれぞれの部分システム間の対応関係は弱まり、経済システムの中での不平等が政治システムの中に不平等を引き起こすということが少なくなっていく。

B 自己言及性

社会の分化の在り方が層的な分化から機能的な分化へと移行するにつれ、社会の自己言及的な側面がより明らかになってくる。ルーマンによると自己言及的なシステムとは、システムが、自分がそれから成り立っている要素を機能的単位として自分で構成し、この要素間の関係において自己構成への指示を同時に行わせ、このようにして自己の構成を継続して再生産することである⁽¹⁷⁾。この意味で自己言及的なシステムは不可避免的に自己接触の中で活動し、環境との接触のためにも自己接触以外の形式を持たない。このような自己言及的な、要素の次元で「アウトポイエシス（自己産出）」的な再生産は、システムを定義するような要素の類型をよりどころにしなければならない⁽¹⁸⁾。ところでこの場合問題になっているのはシステムの形成やシステムの変化という自己組織化の問題ではなく、システムの持続の問題、基本的な出来事からどうやって次へとくるのかという接続の可能性の問題である。

自己言及的なシステム構造から生じる重要な構造的帰結は、一方的な制御の可能性の放棄である。形の上ではヒエラルヒーや非対称性と言ったものがあるが、システムのどのような部分も自分自身が制御から逃れることなしに他を制御することはできない⁽¹⁹⁾。

自己言及的に閉じたシステムは、しかしシステムの環境開放性と矛盾するわけではない。自己言及的な活動様式の完結性はむしろ環境との可能な接触の拡大である。それは規定可能な要素を構成するということを通じてシステムにとって可能となる環境の複雑性を上昇させる。

環境が分化して経験されるということ、すなわち外的分化は、システム形成の必要要件に属する。まったく分化されずに経験される環境に対してはどのような縮限の戦略も展開されない。情報を獲得し加工するためには、システムはその環境の中に差異を必要とする⁽²⁰⁾。

それに対し、もし内的な分化の図式が自律的に選ばれ、環境の所与性、ある

いは環境の所与性と思われるものに接続しないなら、環境への差異はさらに強化される。ルーマンによれば、機能的分化への移行と共に分化の図式は自律的に選ばれるようになる。となると分化の図式は環境の中にながしかの対応関係がなくても社会システムの機能問題のみに従う。

システムは自己言及的に根拠づけられた分化の図式を通じて環境から独立するにつれ、その分化を環境の現象から自立して設計することができる。これはシステムがそのことで存在する環境の分化から独立するという意味においては。そうではなく、システムは環境の現象を自分で選んだ視点のもとで集約し区別することができるということである。このようにしてシステムの分化の上昇は情報の獲得の可能性へと逆に作用する。システムの外部境界として働くものは多くのものをろ過するだけでなく、逆に多くのものを通す。システムは、環境とは異なって構造化されると、分化の図式がこの上昇の機能に十分のように選ばれている限り、環境に対してより敏感になる⁽²¹⁾。

従って、複雑性の落差はそれ自身重要な機能を持っている。それは、環境の複雑性が問題なのか、システムの複雑性が問題なのかにより、複雑性の処理と縮減に異なった形式を強要する。環境はいわばより太っ腹に取り扱われ、多かれ少なかれひとまとめに拒絶されたりする。ある種の逆転された重要性の推測が妥当する。内的な出来事や過程がシステムにとって多分重要である、すなわち接続行為を呼び起こすのに対し、環境の出来事や過程はシステムにとっては多分重要ではない。注意されないままでいい。システムは自己規制の自由や自律性を環境に対する無関心を通じて獲得する。それ故システムの分化を、特定のものの、内的に接続可能なものに対する感受性の上昇とその他のものに対する感受性の鈍さの上昇とも記述することができる。すなわち独立と依存の同時的な上昇である⁽²²⁾。

ルーマンによると環境の出来事は自己言及的過程の条件づけとしてしかシステムに影響できない。それ故システムの状態と環境の状態に一对一の対応は無い。システムが自分の状態をどのように自分に関係づけるかは環境に依存する。環境関係の生じる形態の制限を通じて実際はシステムにとって重要な環境の拡大が達成される⁽²³⁾。もしシステムが自分の自己言及的過程を、環境を自己言及の中に引き込むことなしに環境へと関係づけるなら、環境はシステム内的に相互依存の中断者として投入される。システムは、環境がシステム内的に独立

変数として導入され、相互依存の中断へと利用されることを通じて、環境と区別される。システムの内部では環境は別のものとして、私でないものとして、私達でないものとして現われる⁽²⁴⁾。

現代における個の強化という現象は既にしばしば強調されてきたが、ルーマンはそこに自己言及性という基礎づけをあたえている。機能的社會分化という文脈の中では、それぞれの部分システムは他の部分システムの干渉を避け、独自の選択性を強化することができる。このような自己選択性は自分自身による区別、すなわち自己言及的にしか構造化されない。別の言い方をすると、システムは環境から離れて自律的になっていく。従って、例えば経済システムの問題は経済システム内部で解決すべき問題となり、他のシステムはある意味で経済システムの問題に無関心でいられる。そのことで逆に自分の問題にのみ関心が向けられ、システムの複雑化が可能になる。しかし結果として経済の問題を社会の問題として取り上げる通路は狭くなり、見えにくくされてしまうとも言えるだろう。

個人の水準でも同じことが見られる。ルーマンによると特殊近代的な個人は18世紀の「人間」ではないし、社会が従うべきような「人間像」でもない。特殊近代的意味での個人性はむしろ厳格な意味での持続的な自己観察⁽²⁵⁾、すなわち、私はどのようなものであるかという問いと、または自分自身であるところの観察者の観察と、違ったふうにも選ばれうるという観察の特性と道具化という観点から、常に自身で直面することを要求する。観察の観察を通じて始めて「主体」は、世界から距離を置き、区別の助けを借りて実践されなければならないので、世界ではなく世界の中での能力としてのみ構成される反省の能力を獲得する⁽²⁶⁾。

それ故、ルーマンが「社会学的啓蒙」ということで複雑性の把握と縮限のための人間の能力の効果的な上昇を考えているのも当然の帰結と言えるだろう⁽²⁷⁾。あなたの問題は私の問題ではないなら、私は私だけの問題にだけかわっていけばいいことになる。従って、意識は環境の事実、ないしは環境の出来事を単に当惑、妨害、興奮として導入し、そして内的に自分の構造に応じて自身で特殊化していく。ルーマンによるとこのことは、あるシステムはその環境に対して遮断され、ただその固有振動数に応じてのみ振動に移されるという、物理的な概念「反響」と同じことを言っているという⁽²⁸⁾。

個人の自由度が拡大すれば、それだけ負担が重くなることも意味する。実際、十代向けの雑誌で体験の投稿欄が人気を集めているように、間接的な形で他者の経験への指向は存在する。というのは多分この形なら他者の経験を選択的に加工し、自己産出的な再生産が可能となるからではないだろうか。その上これらの投稿の中には他人のよろこびそうな嘘の投稿が少なからず含まれているという。するとここでは自分の願望を自己選択するという、自己言及的な過程が働いていることになる。

3 共棲的機構

ルーマンに従って考えるとポストモダ的な問題は、機能的に分化した社会における自己言及化の問題と置き換えることができるだろう。この意味ではポストモダン近代の徹底化であるとも言える。既に述べたように、機能的分化の過程で重要な側面はシステムと環境の関係の変化である。システムが環境に依存する限りシステムの自己言及的な過程は制限を受けざるを得ない。特にシステムの物質的あるいは生体的基盤に関してはこのことが重要になる。従ってシステムが自律性を獲得するためには物質的生体的干渉に対し規制を加えていくことが必要となる。ルーマンはそのような規制を共棲的機構とよんでいる。共棲的機構は社会的システムに生体的資源を活性化し、管理し、生体的領域からの障害を社会的に扱うことのできる形式へともたらしことを可能とする、社会的システムの制度である。

ルーマンによると特別な象徴的に一般化されたコミュニケーションの媒介の分化と発展は重要なものの場合、共棲的機構の同時的な分化と発展を、特定の媒介に特定の機構が割り当てられるという形で要求する。例えば権力と物理的暴力、愛と性というように。それ故対応する共棲的機構の規制は象徴的に一般化された媒介コードの構成要素のひとつである⁽²⁸⁾。共棲的機構には二つの側面がある。共棲的機構の存在によりシステムは、片方で物質的領域との関係をシステム形成の条件としながら、もう一方で物質的領域が必要以上に重要としないような制限をつくることができる。

生体的な過程は適した象徴を通じて、象徴コードが生体的過程の重要となる条件を定義するということにより条件づけられる。もちろん生体的領域への関係づけはすべての相互行為システムの中で保持されているが、しかしコミュニ

ケーションの媒介を通じて規制される状況において単なる可能性へと一般化され、再特殊化される⁽³⁰⁾。

固有の共棲的機構への直接的介入によりある媒介コードは他の媒介コードから独立し、また固有のコミュニケーションの媒介を備えた、社会の特定の機能的部分システムも他のものに対し相対的に自律するようになる。固有の共棲的機構は、生体的領域への関係づけが社会の他の機能システムの媒介を必要としないよう作用する⁽³¹⁾。そのことにより部分システムは独自の観点を主張するための立脚点を確保することができる。

社会の複雑性が増大するに従い、媒介コードはより高度に一般化されなければならない。すなわちより様々なコミュニケーションと調和できなければならない。しかしより高度の一般化はより多くのリスクと結びついている。そのようなリスクに対し共棲的機構は保証機能を引き受ける。システムの能力の上昇のためには生体的基礎へ立ち戻れることが不可欠である。

その際、確実性と不確実性は相互に排他的に理解されるべきではないとルーマンは言っている。確実性が生体的な基礎の上で保証されるという事情は、確実性と不確実性を相互に関係づけ、同時に高めていくことを可能とする。そのような確実性の基礎が利用できるということと社会が可能とする、耐えられる不確実性の範囲とは密接に関係している⁽³²⁾。

共棲的基礎の制御可能性の保証と共に、社会的システムの中に未来へと開いた時間の地平が重要となりうるような前提条件が与えられる。生体的に媒介された干渉の十分な制御がすべての場合確実と思われる、予測できない不意の出来事を伴った現在の続きだけではなく、計画が向けられるような将来的現在の選択の構造化された地平を提供する未来が見えてくる。ルーマンは、社会のシステムの場面で問題をより強く時間化によって、様々な出来事や状況を意味を持った前後関係を通じて、解決できる形にもたらす可能性は市民社会で始めてつくりだされたと考えている。その説明のためには共棲的過程の新しい、効果的な「馴化」の形が引き出されなければならない。

そのようなものとしてルーマンは、1) 物理的暴力の行使に到る決断の「国家的」独占の安定化、2) 満たされなければ現われ、行動へ駆り立てるような基本的な欲求の継続的充足の経済的保証、3) 18 世紀の終わり以来広がった市民的な家庭における避妊技術の使用、をあげている⁽³³⁾。

共棲的機構は、たとえその元となっている生体的過程が生じていなくても、また逆につじつまの合わない生体的または心理的出来事の発生が社会的システムにおける共棲の機能をただちに變更させなくても、ある特定の負担の限界に至るまでは働き続ける。例えば性的なことは実際に行われなくてもある特定の負担の限界まで社会的関係の関係点として働いている⁽³⁴⁾。この負担の限界は前に述べたような避妊技術の発達によりずっと拡大され続けてきた。

また同じように基本的な欲求の水準が保証されれば共棲的機構の負担の限界は飛躍的に拡大する。消費は基本的な欲求の充足だけでなくそれ以上の意味を持つことができるようになる。このような発展の結果、部分システムは他の部分システムから自律的となり、また物質的基礎からの独立性を強めることができる。この意味でシステムは自己言及的なシステム形成を可能とするのである。

しかしここで別の問題が生じる。部分部分がそれぞれ独自の発展をすると全体に対して影響を及ぼさないわけではない。部分システムが自律的になれるのは他の部分がある程度計算可能な時である。このような関係が負担の限界を越えようと部分システムは却って自律性を失うことになる。その結果それぞれの部分システムは協調の問題と向かい合わなければならなくなる。クラウド・オフは現在まさしくこのような状況が生じているとし、これを第二水準の近代化の問題とよんでいる⁽³⁵⁾。第二水準の近代化の問題は、既に合理化された部分システム間の共同作業の合理化にかかわるものである。この意味で我々は現在、ポストモダンの問題を抱えていると言ってよいだろう。

おわりに

ルーマンに従って整理すればポストモダンの問題は機能的に分化した社会の問題となる。成層化された社会から機能的に分化した社会への変化の過程で、システムと環境の関係は直接的なものから自己言及的なものへと変化していった。もちろんこの前提として共棲的機構の馴化とも言うべき状況があったことは重要である。その結果、分化のきっかけは環境からシステムへと移り、社会の複雑性は増大した。そして個人はこのような複雑性を耐えなければいけないのである。しかし問題を分化して他の領域に広まらないよう局地化する戦略は逆にまた硬直化をもたらす。そこで最後にルーマンがこの問題にどのような答えを与えているか見ておこう。

ルーマンによると環境の問題がシステムの内部で直接の問題となるのを防ぐためには自己言及の中断が必要であるとしている。すなわち環境はシステムにとって私でないもの、あるいは私達でないものとして現われる。しかし自己言及の中断にも「自然的」と「人工的」の二つのものがある。自然的とは、システムにその作業の可能性の必然的な条件として現われる自己言及の中断である。人工的とは、不確定的な、他でもありうると見做される制約のことである。

ここで重要なのは自然的と見える制約が必ずしも常に自然的ではないことである⁽³⁶⁾。従って自然的と見える制約が実は人工的なもので他でも可能なのだと明らかにする必要がある。ルーマンはこのためには観察という作業が不可欠であるとしている。

ポストモダンという概念も間違いなくそのような観察のひとつのきっかけでなければならないだろう。

〈注〉

- (1) Albel Scherr, "Postmoderne Soziologie-Soziologie der Postmoderne? -Überlegungen zu notwendigen Differenzierungen der sozialwissenschaftlichen Diskussion," Zeitschrift für Soziologie, Bd. 19, 1990, S.5
- (2) John W. Murphy, "Making Sence of Postmodern Sociology," British Journal of Sociology, vol.39, 1988, p.601.
- (3) ibid., p.602.
- (4) ibid., p.611.
- (5) ibid., p.612.
- (6) Scherr, op.cit., S.7.
- (7) ibid., S.8.
- (8) ibid., S.10.
- (9) この点については、酒巻秀明「社会分化論とその問題」「一般論叢」, 1994年8月号の中で詳しく検討しているので参照をお願いしたい。
- (10) Niklas Luhman, "The Self-Description of Society : Crisis Fashion and Sociological Theory," International Journal of Comparative Sociology, vol.25,1984.p.63.
- (11) Nikas Luhmann, "The Differentiation of Society," The Diffe-r entiation of society, 1982, p.241.
- (12) Niklas Luhmann, Soziale Systeme (以下SSと略), 1987,S.262.
- (13) Niklas Luhmann, Soziologische Aufklärung 3 (以下SA3と略), S.208.

- (14) Loc.cit.
- (15) Niklas Luhmann, "Tautologie und Paradoxie in den Selbstbeschreibungen der modernen Gesellschaft," Zeitschrift für Soziologie, Bd.16, 1987, S.161.
- (16) Luhmann 1985a. p.64.
- (17) SS,S.59.
- (18) SS,S.61.
- (19) SS,S.63.
- (20) SS,S.263.
- (21) SS,S.264-5.
- (22) SS,S.250.
- (23) Niklas Luhmann, Funktion der Religion (以下FRと略), 1982, S.27.
- (24) FR,S.28.
- (25) ルーマンによると観察とはある区別の助けによる表示の作業である。
Niklas Luhmann, "Die Autopoiesis des Bewußtseins," Soziale Welt, Bd.36,1985,S.407.参照
- (26) Niklas Luhmann, "Am Ende der Kritischen, Soziologie" Zeitschrift für Soziologie, Bd.20,1991,S.150-1.
- (27) Niklas Luhmann, Soziologische Aufklärung 1,S.77.
- (28) Luhmann 1985,S.417.
- (29) SA3,230.
- (30) SA3,232.
- (31) SA3,237.
- (32) SA3,239.
- (33) SA3,240.
- (34) SA3,230.
- (35) Claus Offe, "Die Utopie der Null-Option. Modernität und Modernisierung als politische Gütekriterien," Soziale Welt Sonderheft 4,1986,S.111.
- (36) Luhmann, 1987, S.172